

21PO-am048

抗原刺激マスト細胞に対する「Licarin A」の薬理効果

○松井 卓哉¹, 井藤 千裕², 糸魚川 政孝³ (愛知医科大,²名城大薬,³東海学園大)

【目的】我々は、これまでに植物資源から単離した flavonoid や cinnamamide などが活性化マスト細胞からの化学伝達物質の産生・放出を抑制することを報告してきている。今回、クスノキ科 *Machilus thunbergii* やニクズク科 *Myristica fragrans* などに含まれる neolignan「licarin A」が抗原刺激マスト細胞に及ぼす薬理効果について検証した。

【方法】抗原刺激マスト細胞に対する薬理効果として、活性化マスト細胞の指標である histamine 放出を HPLC による蛍光法で、培養上清内の TNF α 量および Prostaglandin D₂(PGD₂)量を ELISA 法と EIA 法で、cyclooxygenase 2(COX2)をイムブロット法で測定した。細胞内 Ca²⁺濃度は Fluo4 を用いて共焦点レーザー顕微鏡で観察した。

【結果】Licarin A は、抗原刺激したマスト細胞からの histamine 放出を緩徐に低下させただけであったが、TNF α 量と PGD₂ 量については容量依存的に低下させた。更に licarin A は PGD₂ 産生に関わる COX2 のタンパク発現も抑制した。又、TNF α と COX2 についてタンパク発現と同様に mRNA 量も低下させた。上記の結果を反映するように 20 μ M licarin A は細胞内 Ca²⁺濃度を著しく低下させた。

【考察】Licarin A は抗原刺激したマスト細胞の化学伝達物質の産生および放出を抑制することから、即時型アレルギーの特に遅発相の抑制に有効なシード化合物の候補と考えられる。

